

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年
12月号
通巻628号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



◀大佐渡山地

真野湾をはさんで南部の小佐渡側から大滝哲也さん撮影。桃華園と妙照寺は共に大佐渡山麓にあり、もっと倍率が良ければ、このような写真に写っているかもしれないとのこと。今回の旅では小佐渡を巡る。



▶尖閣湾（大佐渡の外海側）にて

約31年前の平成3年6月29日、右より青山日元さん、法主さん、鈴月かあさん、平田太圭龍・和太龍くん、平田弘之さん

令和4年10月29～31日第347回大倭会文化行事 佐渡での法主様の足跡を訪ねて（報告文・4頁）

昭和48(1973)年12月23日 降誕祭法話より 神の心に沿って生きる

法主 矢追日聖（満62歳）

周囲の意思も神意

今日十二月二十三日は満六十二歳の誕生日でございます。お陰様でここまで無事息災に生きさせて頂き心から感謝しておる次第でございます。毎年この日には皆様方から、また霊界や神さんから色々お祝いを頂いておりまして身に余る光栄でございます。今日まで健在でおられるということは、まだ為さねばならん仕事があつて現界に置いてもらつておるんで、ちょっと里帰りは難しいような状況でございます。

私の祖父母は揃つて六十歳で霊界へ参つておりまして、父は八十歳、母は八十二、三歳であちらの方に行つております。さて私の場合には、この世にどれだけ仕事が残つておるのは神さまだけがご存じですので、人生六十歳を限界とする自分なりの計画を考へて、六十歳までは神さまの指図を受けながら、人間としての行動をする場合には自分の意思でやってまいりました。

六十歳を過ぎてからは、まだ命が残っている、そして世の中に何かしら私に仕事が残つておる、それなら自分以外から出てくる意思で動くとうと決意しておりました。これは分かりやすく言えば人さまに利用されるということなんです。たとえ自分の意思に沿うても沿わなくても、周囲の状況でやらねばならないなら、それはひとつの指示であつて、自分が間に合うのならやっつけていこうという気持ちに

切り替えております。周囲の意思という自分以外のところから来るもの、それも神意であると私は信じているのです。

これからの大倭と私の心境

六十歳を過ぎてからを具体的に申しましたら、株式会社社長の社長になり施設の施設長にもなり、これは自分がせねばと思つてやってまいりました。昭和三十年から三十一年にかけて宗教を母体として設立した社会福祉法人大倭安宿苑は、自分の意思でやったことですから肩書がつくのは好まなかつたし、施設には関係しないで、昨年亡くなられた今井富蔵さんに施設長をしてもらっていました。またその頃は施設に身体を括られては自分の仕事にならなかつたからで、それは私が六十歳になる二年前のことでございます。

六十歳になりますと大倭紫陽花邑もぼつぼつ形が整い、それらしき人間も集まつて来て、自分の気持ちに合ったような世界が現界に出来上がつてきておりました。私の気持ちとすればもう頂点まで行き切つていのです。

そうしますと、あと何年の余命を生きたところで、金が出るか、この地域が広がり施設が大きくなつて住居者が増えるか、外国の人が集まつて文化事業をするかとか、どれだけ発展的に変化しても、これから成つていく先のこととは私の心境においては何一つ希望も理想も無いのです。ただもう魂の抜けた人間が生きておるような心境の現在です。

これからの大倭はもう老化現象です。皆さん方は大倭の将来を色々とお考えのことでしょうが、社会的に見た形として大倭は良くなったというほどの変化があるだけなんです。これが今の時点では想像しうる未来像なんです、私にしてみれば希

望も喜びも何にも無い。ただあつちの世界・霊界に帰る時に、この世において何一つ心残りの無いように里帰りしたい、それ以外に私の望みはありません。

けれどもこれからの大倭の変化が、子供が成長して二十歳、三十歳、四十歳になるような形のものだとしても、こうして頭もしつかりして健康でおらしてもらつてゐるのは、何かの手伝いをするために自分の命が残されてゐるのだとも思つてゐます。それは自分の意思ではなく、周囲や第三者の意思なり心によつて動かなければならぬという意味なんです。

それでまあ建築・土木・不動産を扱う会社の社長の肩書も持つております。株式会社やというても世間的にはちよつと柄が悪いと思われるかもしれませんが。なんせ昔から不動産の業界はややこしいと言つたりしますからね。ですがそんな中でもさすがに大倭の会社やと、絶対的に信頼してもらへる内容の会社にしていくつてくれたら結構だと思ふんです。

私は事務所に座る訳でなく帳簿を見る訳でもありませんが、うちの社員はよくやつてくれているので、私の名前だけが会社で生きておるだけの程度です。また福祉施設でも園長や寮長・施設長になつておりますが、皆が一生懸命やつてくれているので用事の無いかぎり顔は出しません。残された命をこのように使いたい、それも現在の心境なのです。

宗教の根本は一つ

ここは宗教の場ですので、教化指導を活発にやれとか、何百万の信者を作り大きな殿堂も建ててというのが皆さん方の気持ちかと思ふんですが、

あなた方によく知つて欲しいのです。宗教団体を作るとそこに宗教家という者のいわゆる自我が出てくる。そうすると他の宗教団体との比較をしまつて、やっぱり自分の信仰している宗教が一番良いと自惚れるのが普通なんです。

しかし宗教の根本、宗教の本質は一つでなければならぬのです。和服を着ている者もおれば背広を着ている者もおる、けれど人間の本質となれば変わるところはない。だからキリスト教であろうと仏教・神道であろうと、教化指導の方法や信仰態度の形態は変わつても、流れている宗教性は万国一つでなければならぬと思ふのです。

日本の既成宗教を見た場合、あまりにも反宗教的な行き方になつております。宗教の内容を価値づけるものが、信者の数や建物の大きさである現在社会であるがために、一人でも多く信者を増やそうとしたり大きな教会や殿堂を建てようとする。そして信仰しておる者が、ああ、うちの宗教は立派になつた、良い宗教だ、だからこれだけの信者がある、これだけのお堂が建つたと自慢しているという話をよく聞きます。

だがもうそんな宗教は自滅してゐます。宗教があるがために人間の本質を蝕んでゐるのですから、そんなものは無い方がいいんです。私の場合、大倭教の信者であるという特別な意識を持つ者は要りません。そんな者ももし大倭におるとすればひとつの癌のような存在だと思ひます。世界の宗教を蝕んでゆく癌だと思ふ。

自分の精神的修養と人間形成の役にさえ立てばキリスト教でも仏教・神道でも何でも構わないのです。また人には好きずきがありますし、体質に合うものがあるので一律平等にはいきません。けれども、ひとつの宗教団体に入つてしまつてそこ

質でも枠の中にながちりはめられてしまう。もう軍隊のようで、人間はそうやろうと思えば出来るのですが、それが幸せであるか不幸であるか、皆さん方も考えてみれば分かると思うのです。

ひとつの宗教に入って、こう信仰しなければならぬ、ああしなければならぬと規制された時、必ず惨めさや不幸・不平不満を感じるのも人間の性質だと思います。そういう枠を外して自由な世界の中で神さまの道なり仏さんの道で自分を鍛えていく、そうして鍛えた心を自身の仕事に活かしていくのです、仕事そのものが自分です。

現在の自由経済社会では遊んで飯を食うようなことは出来ません。皆が働かなくてはなりません。そうすることによって互いの生活が保証されるのです。身体を動かし頭を使って仕事をするのです。その根源は人間の心であると思うのです。心が満ち足りていなければどんな仕事しても不平不満が出てくる。心が満ち足りておれば、いかなる境遇に放り込まれても、使命感を持って喜んで仕事が出来るはずなんです。

三十歳までの私はかなり人間的にきつい修練をしてまいりました。これは人に言われてではなく自分の意思によって、あるいは神の意思によって、認識の上でこれは不可能で出来ないだろうと思うことでも、能力の限界を試すために自分を痛めつけたりして、人間形成の上で色々なことに取り組んできました。お陰様で栄養失調にもならず六十二歳の今日を迎えることが出来たのは神さまのご加護だと私は信じておるんです。

「一大事の因縁」について

『すさのお』に「一大事の因縁」を連載しております。十回目になりますが、私はこれを亡き父

母の菩提のため、また親の心をこの現界に残すために書いておるのです。(※野草社刊『ながそねの息吹』所収)

文字だけを通して読んでもらいますと、世間によくあるドラマと変わらぬと思います。まあ人間の生きる歩みですから大した相違はございません。けれども私の家の場合には、宿命を受けて生きてきた人間、そしてその生活の場である神の宮の土地に絡む色々な絆、いわゆる因縁がございませぬ。大倭神宮という神地に我々人間が住まいすることによって、神の心と人間の心との様々なトラブルがここ百年に起こっております。それを霊界の話、現界の話を取り交えて「一大事の因縁」として書いておるのですが、これはかなり宗教的にあるいは神靈的に深いものを持っていなければ理解しにくい内容なのです。

今書いておりますのは大正八、九年、私が七八歳か九歳の頃のことです。その時から神秘不可思議なことにつかかってきておるのです。

そこに書いてあるようにキシというのは、父・隆藏の母で私の祖母にあたります。父は詳細なメモを残しておりますので、そこから拾い出して書いておりますが、大正十五年と昭和元年、昭和三年に政府に対して神の意思というものを上申しておった時代がございました。

その頃は父や叔父たちが奥座敷に集まって、過去の事柄を検討したり話し合ったりしておったんですね。そんな時は私が家督相続人でありますので「ぼん、こつちへ来い」といつも傍に呼ばれました。その時の記憶や父のメモなどから推して「一大事の因縁」を書いているのですから、これは事実なんです。作り事でも何でもなくて事実はもっと激しかったのです。普通の文章では書きにくいのですが、対話形式にすると父母や周囲の人

たちの心、味が良く分かります。私の立場でもさうと書いたのではどうも味がありません。活字にしますと自分の気持ちにあるだけのことが表現できませんしね。

私の家と、そこへ因縁を持って生まれてくる人間、大倭の神地の三者一体としたその中で、今は私一人だけが生存しているのです。何万年前からその土地にあった宿縁という流れ、その一番難儀な時期を生き抜いてたった一人残った私ですから、同じような境遇の人たちの参考にもなればとも思っております。

「皆仲良く」それ以外にはない

先ほども触れましたが、大倭で信仰される方は「大倭教」というような意識を持ってもらったら困るのです。ここは神ながらの神の心を根幹として成り立っているところだと分かって頂ければそれだけで十分です。

我々は地球の皮に湧いてきた動物で、神さまは互いに仲良く暮らすように作っておかれたはずなんです。それぞれは能力差がありますが、社会とは全部一つに繋がったものなので、持ちつ持たれつ相互扶助で、助け合っていることとこれが神さまの心やと思うのです。難しい教理は何も必要ありません、皆が仲良く出来たらいいのです。それ以外に言うことはありません。

仲良くするためにはちょっと難しい問題があるだけのこと、その窓口というのが腹を立てぬ人間、争わない人間なのですが、これは難しい修養だと思えます。比叡山で何年も修行して滝行を積んだ、そんな偉い人でも気に沿わんことを言えば腹を立てるとしたら、人間が出来てないということですね。朝の四時から座禅したり、冷たい水に

かかるだけが修養ではない。

誰と会うても仲良ういける、腹を立てない争いを起こさない、皆と助け合って調和を取る自分にならなければなりません。それが出来たら神さんも仏さんも宗教も何も要りません。それが出来ないから道徳や法律、宗教やらが出てくるのです。犬や猫の世界に法律も何にも無いけど仲良う遊んでますよ。あれを見ると人間は情けない動物やなあと思うんです。天然自然が定めた動物としての人間らしい人間・自分になろうと努力するのが、こここの神ながらの宗教の根本でございます。

昨晩は寒うて氷が張り雪も降ったかして氷の上の雪がきれいでしたが、今は曇が降っておるのです。それで私も禊をさせられております。天の变化は常で、人間の心も変化があります。仲良うすることに変わりはありません。雨が降れば傘をさし、雪ならダルマを作って遊ばばいい。どんなことがあっても神の心だ、仲良うする手段、だとしてやっていくのです。

百まで生きる人はめったにありません。わしの財産や、勲一等ももらったの言うても白骨になれはお終いです。薄い氷の上を歩くような人生で、死ぬ時は全部置いていかならん、生きてる時に使わしてもらっているだけ。それなら皆で寄って使って喜んだらいいのです。

あと何年の命が私にあるか分かりません。これからは宗教やらを切り離れた平々凡々な、髭のええおじいちゃんと言われて皆さんと共に世渡りしたい。宗教とか神さんとかを抜きにして、人間対人間の立場で仲良う暮らしてこの世を終わりたいと念願するのです。これが私の今の心です。

どうかこのことがあなたの方の心に刻まれて、今後ともお付き合いをよろしくと希望いたします。

(文責・編集部)

第347回大倭会文化行事

佐渡での法主様の足跡を訪ねて

令和4年10月29〜31日2泊3日の旅

順徳さんと日蓮さんの佐渡島へ

あじさい色 杉本順一

令和4年10月29日、邑近くにある藤ノ木台バス停から朝8時20分に奈良交通の観光バスで18名が出発。8時間をバスの中で過ごすため、法話CDを4枚用意。こんな文化行事は初めて……。

午後4時、直江津の鶴の浜温泉のロイヤルホテル小林に無事到着。ここで合流の10名は、遅刻のお1人を除き、すでにホテルのロビーで待っておられた。

夕食後、簡単に自己紹介をして、明日訪問予定の真野御陵については私が、妙宣寺・塚原山根本寺・妙照寺については林修三さんが少しずつ話した。

部屋にもどって雑談。8時間のバス旅行は疲れた。お風呂に入る元気もなくフトンに。ゆっくり寝るはずが、午前3時頃か？順徳さんが話しかけてくる。後鳥羽上皇等と鎌倉幕府打倒に拳兵した時の自分の気持を述べてきた。

あの時は「一力」によって生きようとしたが、スメラミコトの本来の使命を知らず、その酬いを受けての21年間であった(佐渡島に幽閉)。その罪障消滅のため弘之を我が身として転生したのだと……。(弘之とは桃華園の平田弘之さん、令和2年5月帰幽)

30日朝8時出発、直江津港から(※ここで静岡県浜松市の松尾元子さんが合流。別の用事で佐渡に来ていたので宿泊はせず30日だけの参加)、8時55分のジェットfoilで小木港へ(※ここ



▲30日、最初の真野御陵の前で



◀31日、宿根木にてたらい船

先着順

で大滝哲也さんが合流)。ここからは新潟交通のバスにお世話になった。早めの昼食は寿司民宿長浜荘魚道場でお寿司をいただいた。佐渡島で最初のお訪ね先は、順徳天皇(※後に退位し上皇)火葬塚・真野御陵である。ここには、この夜お世話になる桃華園の女将、平田緑さんも娘の美姫さんや孫さん達と共に参加してくれた。御陵でご挨拶の後、皆さんに、昨夜、順徳さんが話された彼の思いを話し、緑さんの夫・弘之さんは順徳上皇の転生された人であることも話すこ

とになった。

思うに、法主様が平成3年6月28日から桃華園に2泊3日された時、順徳上皇は法主様によって鎮魂されていたからこそ、昨夜のような話を私にされたのだと気付いた次第である。

御陵の次に、日蓮聖人にご縁の寺々をめぐる。各寺に足を運んだがどのお寺さんでも、以前鎌倉への文化行事において日蓮聖人ご縁の場所を感じた日蓮さんの気配を、私は感じられなかった。眠らせてくれない順徳さんと無言の日蓮さんの対比がおかしかった。

4時すぎ桃華園に着いた。黒柴犬のサンペイちゃんやんが全身で歓迎の挨拶をしてくれた。

夕食は6時頃、1人1杯ずつのベニスワイガニ。これを空にしないと次の料理が出せませんとのこと。皆さん、食べるのに全力投球といったふう。満腹になったところで、恒例の且田容子さんの手品。3年ぶりの文化行事で修練充分？な手品を楽しんだ。その後は、「問わず語り」をしていただけのことになった。

皆さん日頃は表に出せないような、それぞれの人生の思いを語られた。各々の因縁に基づく、「一大事の因縁物語」の数々となった。これは正に、法主の言われてきた「顕幽不二」を自覚された、それぞれの「味の世界」の語りであった。

この時、今回はなぜ「無言の日蓮」さんだったのか、私は納得できた。

おかげでこの夜は風呂に入れたし、充分寝られた。31日早めに目覚めた。ゆっくりと朝食をいただきます9時に出発するバスに乗りとうとした時、美姫さんが「杉本さん、お父さんはどうしていますか？」と声をかけてきた。私は即座にお答えした。「お父さんは『法主の救いを受けて、いいところにおる』

と言うてはるよ」と、これだけ言って、名残りはつきなかつたけれど、バスは出発。

バスの運転手さんのはからいで、朱鷺が田んぼに10羽近くおりているところを見せて下さった。宿根木集落で休憩時間中に海岸でたらい船を築しむ勇氣ある人達もいた。

帰りもジェットfoil。船中で弁当をいただいて直江津港に着いた。大倭組は、ここに1泊して待っていてくれた奈良交通バスに乗り、他それぞれの形で帰路につかれた。車で来られた新皇教官組とは長く手を振り合った。

バスで再び8時間、午後7時45分頃、帰着。

✿むすびいっしょを想う旅

福井県 齋藤正宏

佐渡は日本一大きな離島である。米処でありながら、おけさ柿からシャインマスカットまで、採れ、蟹や寒鰯などの海の幸にも恵まれた豊かな島であった。しかし順徳上皇や日蓮さんが流された頃の佐渡は雪深い北国の離れ小島であつたらう。

はじめに伺つた真野御陵は、承久の乱で敗れて流された順徳帝が火葬された塚。いつの日か都に還るといふ希望に支えられた暮らしは21年に及んだが、息子の皇位継承もかなわず、最期は食を絶つての自害だったとされる。

御陵の前での杉本さんからの説明で、順徳帝が権力の座にあつた時の罪障を滅することが平田弘之さんの背負つてこられたお役目であつたと教わる。数年前に佐渡を訪ねた折、同じ場所を案内していただいた弘之さんに漂つていた「寂しさ」のようなものの謎が解けた思いで手を合わせた。

紅葉が始まったばかりの晴天のもと、妙宣寺、塚原山根本寺……と日蓮さん縁りの旧跡を巡る。どの寺も綺麗に整えられていたが、配流の頃は荒

野だった地。懸命に生き延び、この地で出会った人々と教えの場をもつに至るまでの試練が偲ばれた。

旅の資料として手渡された「神通力如是」のなかで、日蓮さんが真の妙法・題目を人々に伝えきれなかつたことを悔やみ、法主さんに託されるくだりが伝えられている。

聖徳太子から日蓮さん、法主さんと連なる霊統。それぞれは、その時々々の個人として懸命に教えを説きつつも、時空を越えて連なっている真理。それこそが「うつしみはよくつるとも……」で語られている顕幽に渡る実相であり、その宇宙への帰依としての「ナモタカマノハラ」と捉えたら良いのだろうか。

かつて平将門さん縁りの鎧武者に出くわし、誘われるままに巡つた旅先のひとつ、水俣で出会つた高倉敦子さんとは今もこうして旅を共にしているし、もとより将門さんとのご縁を解き明かしてくださつた法主さんに至る旅は、久しぶりに再会できた新皇教官の馬場さんと桜井さんご一家とお付き合ひの始まりへと連なつていた。

自身の人生の節目を彩つてくださった方々と、こうした旅を共にできたこと自体が、その後におられるであろう方々ともども「とこしえにむすぶ」顕幽一体の瞬間のように思われた。

夕食の片付けが終わつた後、桃華園の平田緑さんが古い写真を出してこられた。31年前、法主さん、鈴木母さん、日元さんが佐渡を訪ねられた折のものである。当時、旅のお供をされた高橋良美さんも加わり、昔話に華が咲いた。

「弘之さん、やっと来られたよ」。直前まで旅していた沖縄土産の古酒を開け、皆と杯を傾けた。最後に、この旅を準備いただいた大倭会の皆様、桃華園の平田緑さん、有難うございました。

初めての文化行事、佐渡島

奈良県 竹内 靖

宿泊の文化行事も佐渡島行きも初めて尽くしてした。私は参加者の中で、法王様との付き合いがそれ程深いわけでもなく、靈的な感性が全く無い上に、デリケートな心を少しも持ち合わせていない為、ほとんど観光気分に参加しました。

さて感想を書けということです。なにぶん新潟までのバスの乗車時間が長かったのですが、途中で何度も休憩をはさんで身体に負担が無いように配慮して頂いた点は、幹事の溝口さんには心より感謝しております。私は北陸地方では、福井県より北方向に入ったことがなかったので、車窓の風景が新鮮で興味深く、満喫することが出来、長旅にも拘らず苦にもなりませんでした。行き帰りのバスの中で皆が退屈してはいけなかった、岸田会長は法王さんの法話をCDで流されました。

その中でよく法王さんが言われていた、「人間は身体が減びても魂は存在していて、目には見えなくても、あなたのほんの周りにいるんですよ。ひと時もあなたのことを忘れていませんよ。だからあなたも亡くなられた方を頭の片隅に置いていてください」ということを何回か聴かせて頂いて、自分の心に、ふと亡くなられ方を思い出す度に、ああそうゆうことかと納得しています。

また佐渡島での順徳天皇、日蓮聖人のゆかりの名跡を訪ねる行程は、個人的には一般の観光と違い、佐渡島と大倭との関わりを別として、歴史好きの私としては大満足でした。語り部としての林さん、杉本さんの話は臨場感溢れるすばらしいもので、話に聞き入り感動しました。

最後に訪れた妙照寺は、日蓮聖人が2年半暮らした、特に「日蓮聖人の佐渡流罪」の象徴的なお

寺で、その妙照寺が2年前全焼して僧房はなく、寺門だけが野ざらしになっていて、鎌倉時代に建立された基壇が寂しく残され、ものの哀れを感じ、思わず込み上がってくるものがありました。

私自身の目的の一つでもある大倭会の方々との交流については、地元奈良も含め全国の、大倭や法王さんと関わりのある方と語らうことが出来、佐渡にわたる前日の上越のホテル、2日目の桃華園で飲食を共にしたことがとても意義深いものでした。会話の中では数々のエピソードがあり、私の知らない色々な話を知ることが出来、大倭と法王さんそのものの大きさ、多くの人との繋がり、深さを感じました。

個人として、今回、是非参加しようと思った経緯には特別な思いがありました。大倭殖産の社員・役員として35年を超え、人生の半分以上が大倭での仕事・生活であり、来年からは違う立場で働くこととなります。

私と大倭との関わりは大倭病院が始まりで、父親が創設時お世話になったこと、又母親が平成7年に大倭病院で息を引き取ったこと、最後にその大倭病院の募引きを私がお手伝いをさせて頂いたことは、何か因縁的なことを感じます。

今回参加者の皆さんと色々お話をさせて頂いたことは私の人生において大変有意義でもあり、励みにもなります。一人の人間として大倭との関わりを持ったことは最大の幸せであり、今後を持ち続けていきたいと思っています。皆さんよろしくお願ひ致します。

島内で30年以上

佐渡にて 大滝哲也

このたびの文化行事では、大倭会の皆様と民宿桃華園様のごはからいにより、私は佐渡島内をこ

一緒させて頂くことができました。好天にも恵まれ、佐渡の日差しの中で大倭の和やかな空気を感ぜさせて頂きました。懐かしい方々とも再会させて頂き、とてもありがたく思っております。

さて、法王様はよく「人にはそれぞれ使命というものがある」とおっしゃっておられました。自分のそれは一体何だろうか？と考えてもずつとわからずにおります。

人生を振り返ってみると、まず小学校5年生から中学校1年生まで父の赴任先中東レバノンでの生活、当地での戦争体験（これは後のアジア旅行の動機）。帰国後の不良化と校内暴力、登校拒否と引きこもり、それがきっかけで大倭のお世話になりました。青山日元さんのもとでさまざまな外仕事を学んだ1年間（これは特に現在の家の補修や畑仕事に不可欠）、大倭印刷でのデザイン関係の学習（これは現在のホームページ作成に必要）。退職後のアジア旅行では、インドの原始生活に近い行者さんと寝食を共にさせて頂いたり、家電製品は数個の裸電球だけというネパールの農家を間借りしての自炊生活を体験しました（共に今の生活に大きく影響）。

帰国後田舎暮らしを考えていたところ、当時奈良市在住の平田夫妻から「佐渡で民宿やるけど一緒に来ない？」とのお誘いにより、1989年に佐渡へ流れ着きました。民宿退職後は島内の借家を転々とし、現在の家にたどり着いてから20年以上になります。バスの中でも言いましたが、これは今まで最長だった大倭の8年（9年は誤り）を抜いて最長になっています。

地元の家電量販店の初対面の店員さんに、「捨てるようなパソコンありますか？」とダメ元で言ったら、なんと奥から中古のデスクトップパソコンを出してきてくれて無料で下さいました。それ

を手始めにインターネットの環境が自然にそろい、未熟ながら『とおやまと』の編集に参加させて頂いております。これが私の使命なのかはわかりませんが、この流れを考えるとそれは否定できないと思っています。

佐渡で待ち受けていたもの

熊本県 高倉敦子

『とおやまと』7月号を見たら3年ぶりに大倭会文化行事が復活し、行き先が佐渡島。思わず胸が高鳴った。私にとつての3年間とは、水俣市内がよく見渡せる小高い山の上(標高333m)に、慰霊と鎮魂のために建立されたものの何があったのか頓挫し、未完成のまま苔むし黒ずみ封印されて38年という仏舍利塔との突然の出会い。

放っておけなくなり、きれいにしたいと思ったのが私なのか誰なのか、憑りつかれたように動き回るといふ日々突入。お陰で日蓮聖人を始め日本山妙法寺の山主、藤井日達上人が遠い人ではなくなり、共鳴し応援にかけつけてくれた友達や、勿論日本山妙法寺のご支援、水俣の人たちを始め、沢山の方のボランティア作業により、未だに信じられないが、昨年10月3日に落慶法要というありがたい流れにこぎつけた。

とはいえ奈落の底に突き落とされるような体験もあり(仏事とはそういうものらしい)、大きな葛藤とともに、南無妙法蓮華経のお題目を唱えることで前に進んで行けるのだった。法華経に触れることで險しくもなり嬉しくもあり、「神通力如是」の連載をいっしかり心待ちにするようになった。読みながら気持ちが明るくなるような、法主さんと対話している安心感というのか、敵しいだけでなく、束の間でも解放される気持ちになれるのがこれまたありがたかった。

佐渡での法主様の足跡を訪ねてとある。当然だが宿泊先が桃華園。平田弘之さんの訃報を『とおやまと』紙上で知った時のショックが蘇り、ぜひ皆さんと行きたいという気持ちになったもの、果たして行けるのかとその時は半信半疑だった。というのも、先に予定を入れていたのが沖繩の久高島行き。そこで10月15日の自分の誕生日を迎えようと思い立ち、タイミングがバッチリのリトリートに参加を決めていた。イザイホーという30歳以上の島出身の女性だけで行う神事が途絶えた島に、女たちが集って踊ろうという呼びかけにすぐさま反応した。2001年の初日の出をこの島のイシキハマで拝んで以来なので、21年ぶりの再訪にわくわくしたが、一方で順徳天皇は幕府によって京都から佐渡に移されたまま21年間、島を出ることなく生涯を閉じたこと知らされる。21年間なのだ。

13、16日まで休みを取ることを決めたその後に、岸田哲さんから佐渡へのお誘いが来た。どっちかをあきらめるといふ選択肢は無く、考えずに即、鹿児島羽田間の往復チケットだけ予約した。何故か最安値のタイミング。怒涛の10月、南北2か所の島行き。参加締め切りの後になり、行かないと言っていた永飯あづみちゃんから「佐渡に行くことにした」との連絡があった時は、何故かほっとした。

14日にフェリーで久高に渡る予定が、悪天候のため15日に変更になり、急遽南城市に泊まることになる。しかも宿泊先に指定されたユニチホテルは、2013年、平田さんも参加していた18回目的賑わい塾の会場になった所だ。夕飯前に大浴場への通路で同室の人と話していると、いきなり「敦ちゃん?!」と声をかけられた。顔を向けるとなんとそこには佐渡行きで直江津から車に乗せて

もらう約束をしていた福井の齋藤正宏さん。何故直江津でなくこのホテルで突然の再会を果たすわけ? 聞くと2、3日前に旅行先を沖繩、そしてこのホテルに決めたというのが不思議過ぎる。その時お互いに交わした言葉は、「じゃあ月末に!」と。これは念押しなのか?

と同時に、今になって頭をよぎるのは、ご縁で水俣の仏舍利塔のために協力をさせて頂いていた「南部」さんという日本山の信徒の方。末期がんで7日の朝に亡くなっておられたことを後日知って驚いたのだが、大倭会から送られてきた資料の中の『日蓮聖人伝絵巻』というカラーの資料の⑥身延入山のところをよく見ると、「南部」六郎實長という聖人に帰依していた身延の地頭の名前が登場する。そこには《佐渡流罪を許された大聖人御一行を出迎えられたと伝わりませう。》と書かれていたのが気になる。おまけに、南部さんは福井の人で、佐渡にもよく行っておられたという。数えるところ初七日に当たる日だった。見えな人となつていっしょに佐渡に行きたいと、その思いを伝えるに来て下さったのかもしれない。生きているうちに再会を果たせばよかったのにと、私が悔やんでも始まらない。顔が何度も浮かんで消えるのだった。

翌朝の久高行きのフェリーは無事出発し、海の上には虹が立った。まさか佐渡汽船のフェリーの中からも、同じく虹を見ることになろうとは。

そしてとうとう佐渡島へ。諸々の再会、まるでみんな親戚だ。懐かしいだけでなく、そこにはいつも法主さんの存在がある。随分長い時間、奈良に行くことができなかつたのにも関わらず、ご飯と一緒に食べながら笑いながら、そんな隔たりなどは微塵も無い。私にとつて初めての文化行事参加なのに、もう何回も皆さんと一緒したような

気持ちになつてくる。直江津港でフェリーを待っている間、群馬から参加された内田誓子さんが、「高倉さんを見てたら懐かしくて」と、思わず涙でハグして下さるので嬉しかった。ありのままが最高だ。どうも縄文時代に遡るようだが、言われてみれば今回の旅行、相当古いご縁が集まっているのかもしれない。

佐渡に着き、平田緑さんのお出迎え、お元氣そうにしているのがありがたかった。再会。目的は真野御陵、語る言葉もなく涙しかない。悲しいというわけでは無く、ただ積年の思いが私には余りに計り知れなくて、じつとたえずむことが祈りのようだった。しばし沈黙とともにいた。もつと近くに行きたくても柵があり、鍵がかかっている入れないもどかしさ。でも御陵は光り輝いていて、しっかりと目に胸に焼き付け手を合わせた。

次の妙宣寺、山門に阿仏房と掲げているのが素晴らしい。8年前の賑栄い塾で、お参りした時もだったが更に今回美しく凛とした五重塔。きれいに手入れされたお庭に感謝しながら歩いた後に、なんだか忘れ物をしたような気持ちになりまた本堂?へと逆戻り。入口に少しだけ並べてあった交通安全のお守りを、赤と青のふたつ、いただくことにした。「ブザーを押して下さい」とあったのでおもむろに押すと、奥から小柄な任職が、実に静かにそっと出て来られ、私は思わず合掌。日蓮聖人と出会い、念仏から法華経に帰依。大聖人の拜所に足繁く通い、一切の身の回りのお世話をしてきた夫妻のことを、阿仏房御書の中で日蓮聖人は《阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし。淨行菩薩うまれかわり給いてや日蓮を御とふらい給うか。不思議なり不思議なり。》と申された。なんだかこの時、その方にお会いできたような気持ちになった。

次に向かった塚原山根本寺、どうした訳かつかみどころが無く、手の合わせように困った。塚原三味堂とはいったいどこに?

そして最後にとうとう、全焼した妙照寺とご対面。唾然としたがある意味必然だったのか。焼け残ったのは大曼荼羅だけというもなるほどと、頷いた。その焼け野原に立ち、日蓮さんを思ってみるが、からつとして明るいのだ。日本山の武田上人さんからお話を聞いていた、お寺の近くに建立されたという仏舍利塔に、できれば行ってみたいと思うがすぐにはわからず、また時間も無かった。すると櫻井保さんが「高橋良美さんがあつちに行つたよ」と教えて下さるので、その気配を頼りに慌てて探しに飛んで行つてみた。草深い古い石段を昇っていくと、向こうからやって来る良美さんに遭遇、「あつたよ!」と。見上げるとあつたのだ。見つけて下さった良美さんと、足繁く佐渡に通われたであろう南部さんに、思わず南無妙法蓮華経、合掌。

桃華園到着。部屋に荷物を置いてしゃべっていると、突然岸田さんの「虹が出てる!」と嬉しそうに叫ぶ声。慌てて外に飛び出すと桃華園の真上にまたもや見事なアーチ型の虹が立っていた。弘之さんは佐渡と世界をつなぐ架け橋のような人だったのではないだろうか。

桃華園に来たら蟹なのだ。夕飯の席で皆無言でかぶりつく、美味い。こんななゆっくりお話しできる機会はもうそんなに無いのかもしれない。たまたま目の前が中島健さん。大倭に行つてもご挨拶だけで、中々お話しする時間も無かったが、「高倉さんはいい時に法主さんに出会っている」と言われて、そういう話をして下さる中島さんに今回出会えたことが私はとても嬉しかった。更になんとも愛らしいマジシャン登場で笑いの渦が巻き起

こる。素晴らしい。こんな和みの時をみんなが待っていた。何があるかと佐渡はまほろば、去り難くなってきた。

感想文を書くことすると、本棚からまるで待っていたかのように『第19回賑栄い塾 in 佐渡記録集 - 佐渡からもうひとつの日本を考える -』が飛び出した。2014年10月11~13日。編者は平田さん、そして岸田さん。なんと108ページの大作だ。資料として、佐渡に流された主な人たち59人の中に、1221年(承久三年七月二十一日)順徳上皇、その50年後の1271年(文永八年九月十二日)僧日蓮と、二人の名前が隣り合わせに並んでいる。《佐渡博物館(1993) 図説佐渡島p46より》

先に流された順徳天皇がまるで日蓮さんに寄り添ったような、そんな思いのつまった集いを平田さんは意を決して準備してくれたのかと、申し訳ないが消化しきれずいたのが、あれから8年の歳月を経てみてやっと受け取れた。1ページずつ丁寧に端から読んでみた。この凄い分量をテープ起こして下さった。不転転という言葉が浮かんでくる。講師の皆さんが日蓮さんみたいな熱量の塊のような会だったことを思い出す。身供養で急ぎ足に霊界に行つてしまわれたが、この記録の中でやっと出会えた気がしている。発行を急ぎ、誤字もありながらの快挙。

今回一番感じたのは、本音で語り合える場が確実に必要であるということ。罪人が流される佐渡島でなく、志高き人たちの声をこの豊かな島に来て感じてほしいとの弘之さんの強い思い。これはきつとバトンタッチされていると思うのだ。例えばコロナ禍であったとしても。

質問したいことがあり林修三さんに電話をかけると、法華経のポイントである「一念三千、久遠



▶30日、妙宣寺の五重の塔



▲30日
塚原山根本寺の日蓮像

◀30日、妙照寺
焼け跡の法華曼荼羅



▼30日夕、桃華園の虹



(写真：齋藤・高倉・岸田)

大倭神宮の神々があらわれているという「あけぼの」の写真(令和2年『おおやまと』1月号表紙)を彷彿とさせるのは気のせいだろうか。日蓮聖人が、もし「あけぼの」の様な光を感じられ、それを文字であらわされようとするれば、この曼荼羅のようになると思えるのですが……。それはともかく、後の人々はこの文字を具体的な絵とし、さらに立体化した像へと変えていくことになりました。

妙照寺の法華曼荼羅について 林 修三
日蓮聖人は佐渡への流罪という受難を通して、初めて佐渡の地で『法華経』の教えを、文字による曼荼羅本尊として書き顕わした。これは『佐渡始頭曼荼羅本尊』と称され、人々の守護と礼拝の対象となつている。その特徴的な点画を伸ばす文字は輝く仏界の光明を表しているという。

「実成」を何回も口にするので思わず書き留め、ふとこれはどこかで見た覚えが……とまた記録集をめぐって見た。林さんが8年前にこう書いていた。「一念三千」「顕幽不二」「久遠実成」「還元帰一」と。失われるものなど何も無いと教えていただいた気がしてすつとした。

この記録集巻頭の平田さんの文章を転載したい。《昨年沖繩の賑栄い塾に久しぶりに参加させて頂きました。旧知の人々、新しい人々との出会いの場がとても心地よく、また魂のふれあいや神ながらのことなどがすつと身体に入ってきました。私は今まで、第1回の野草塾や愛善苑での野草塾にスタッフとして参加し、機会があれば私の住んでいる佐渡で開催したいと考えていたのです。佐渡に移住して25年、多くの方々とも交流ができ、佐渡をより良くするために地元を元気づけ頑張っている先輩たちとも友達になれました。その人達とも同じ場を共有したい

と思ひ、佐渡での賑栄い塾の企画を立ち上げました。しかし台風19号と19回目の賑栄い塾という機縁のなか、あいにく沖繩発の飛行機が欠航し野本三吉さんは欠席でしたが、無事にハードな日程もこなすことができました。本当にありがとうございました。はるばる佐渡まで来られた参加された皆様、快く講師・パネリストを引き受けてくださった皆様、多くのスタッフの皆様へ感謝です。この感動を残したいと考え記録集の編纂を致しました。不備もごさいますが、御一読下されば幸いです。

最後に、大倭紫陽花色の故矢追日聖法主に報恩感謝。 2014年12月3日 平田弘之

弘之さん、緑さん、法主さん、皆さんありがとうございます。ありがとうございました。

幹事の溝口さんから送っていただいた写真、全員が実に晴れやかで清々しいですね。緑さんと娘さんの笑顔が嬉しい。大きく伸ばしていただきありがとうございます。

各地でまた、小さな集いを起こしながら、時々こうして思い切り再会できますように。

佐渡が持つ役割は大きいと、今回やっと気づかせていただきました。

●桃華園の虹

東京都 永飯あづみ

大倭文化行事で佐渡の旅に行ってきた。1日目は、直江津港近くのホテルが目的地。佐渡へ船で渡るのは翌朝というわけだ。大倭からは8時頃出発。私は東京から家を10時頃出発し直接ホテルへ向かう。直江津駅まで普通列車で6時間。途中、六日町駅の辺りで窓の外にダブルラインボーが見えた。思わず窓際の席に駆け寄る。車両の中が一気に沸き立つ。見知らぬ者同士が顔を見合せて

「幸先が良さそうだ」と笑顔になる。無事にホテルに到着。大きな窓から見えていた夕焼けと海の景色が、あっという間に真っ暗になっていった。

2日目、直江津港から高速ジェット船で1時間程で佐渡に到着。昼食後、真野御陵へ。土産屋の先に大きな赤玉石が並ぶ。その先の道を行くと、松の木が生い茂る、いかにも天皇陵という雰囲気漂う。

杉本さんが、平田さんは順徳天皇の生まれ変わりだったと話される。国の父であるのに権力で国を治めようとしたことに苦しんだというような話。そして、私達一人一人を思っているような話。そして、その話を聞いて時間差数秒で、何かが流れ込んできて込み上げてくるような感覚があり、勝手に涙が何度も溢れてきた。杉本志津女さんがお菓子に順徳天皇さんに差し上げた。杉本さんが「こんなものを貰ったのははじめてだ」とメッセージを受け取ったらしい。ロッテのカスタードケーキ(しかも定番のものではなく、一度は行きたい名店シリーズのキャラメルナッツ味)。そりゃあそうだよなあと思っていたら、私にもお菓子を分けてくださった。その場で封を開けて、順徳天皇さんと一緒に味わった。

その後は妙宣寺、塚原山根本寺、妙照寺を巡り、16時には桃華園に到着。屋根の上で烏がカアカアと鳴いていて、平田さんが出迎えてくれてるように勝手に思った。サンペイ(桃華園で飼っている犬)は私に懐いているようだったが、ポケットの中の食べかけのカスタードケーキを狙っていたに違いない。サンペイに取られる前に食べることにした。

部屋で寛いでいると、外で「虹が出てるよー」との声が聞こえてくる。外に出てみると、見事に

桃華園を囲むように綺麗な虹が出ていた。人知の及ばないおもてなしの大きさに感嘆した。何もかも美味しい食事に、話も尽きず、あっという間に佐渡での夜も更けた。

3日目、11時頃の船に乗って帰る。桃華園出たら宿根木を散策し、小木港で買い物。電車一本遅れると4時間遅い帰宅になるため、名残惜しくも船の中で皆さんと握手を交わしたり挨拶をして急いで船を降りた。5名で齋藤さんの車に乗り込み、駐車場の出口で料金を支払おうとすると「営業終了!無料!」と管理人さん。直江津港へ小木港間は今日で営業終了、春までお休みなのだそう。驚きと喜びの声に包まれる車内。お後がよろしく、時間にも余裕を持って直江津駅に到着。それぞれの帰路についた。

無事に帰宅し、お土産のカニ味噌と日本酒を飲みながら同居の姉(まゆり)に旅の報告。話し尽くしたところで平田さんの話になる。賑栄い塾の最終回(秩父で開催)の時、私は「白扇の」という踊りを披露させてもらった。「その時に平田さんが、この踊りを楽しみに来たと言っていたのが印象的だった」と姉が教えてくれた。平田さんは賑栄い塾や大倭で何度もお会いしているが、よく知らないのが正直なところだ。稚拙な私の踊りをみて平田さんがどう感じたのかはわからないが「しばしの憩い」を感じてもらえたのであれば、踊って良かったなあと思える。

その平田さんの姿と「いかにして 契りおきけん 白菊を 都忘れと名付くるも憂し」と詠った順徳天皇の姿が少し重なったような気がした。

佐渡にて鎌倉と佐渡ヶ島との縁を想う

神奈川県 高橋健一

小学校から大学まで横浜で育ち25歳で結婚し鎌

倉に転居。その後茅ヶ崎に定住し66歳になった。

今年(2022)はNHKの大河「鎌倉殿の13人」を見だした。ドラマは「しゅんどん」鎌倉の歴史のすぎまじさを再認識する。そのうえ今年には文化行事にも参加でき順徳天皇や日蓮さんの鎌倉時代の出来事をあらためて実感を持って知れた。そのためか自分の人生に鎌倉という地が深く関わっていたという関連妄想が膨らみ始めた。

横浜時代、妻は高校時代からの同じサークルの先輩(妻が1学年上)だった。高校を卒業後も7年ほどはまったく普通の友達付き合いをしていた。1981年25歳の夏、何故か鎌倉由比ヶ浜の花火大会に行った。花火の上がる由比ヶ浜でふたりは初めて手を繋ぐ。打ち上げが終わり喧騒の消えた浜。僕は彼女の膝枕に寝ていた。友達から恋人に変わった瞬間。由比ヶ浜、暑い夏の砂浜だった。しかし鎌倉時代は屍の浜だったらしい。その後の結婚生活が波乱万丈だったのも合点がいく。

ふたりは何かに突き動かされるように半年後の82年正月に結婚することになる。ふたりとも横浜に住んでいたが、当時彼女は「いのちの電話」の相談ボランティアをしていて、カウンセリング研修の指導者が日本基督教団鎌倉恩寵教会の内藤協初代牧師だった。そのご縁で結婚式は鎌倉恩寵教会で行うことになる。親族との披露宴は教会では出来ないの鎌倉八幡宮参道段葛横にある鎌倉鶴ヶ岡会館で行うことになる。しかし1月15日は当時から成人式の祭りで初詣客も重なり、恩寵教会から鶴ヶ岡会館までのタクシードレスの新婦と白いタキシードの僕は手をつなぎ小町通りを走った。日蓮さんが辻説法をしていた小町通りだ。

長男は鎌倉市常楽寺前の家賃が格安なので転居した古民家で自宅出産だった。常楽寺には北条泰

時の墓があると知る。次男は北鎌倉の助産院で生まれた。三男は茅ヶ崎生まれだが大庭御厨の領主大庭景義(景能)が建立した円藏神明大神宮の向かいの小さな借家で自宅出産だった。

僕が小学5年のとき父は42歳で癌で亡くなった。戦前は近衛兵で終戦は皇居内で迎えたらしい。母は僕らの結婚後に再婚し20年前に71歳で亡くなった。母は靈感の強い人で再婚(共同生活者?)相手は陰陽師のような占い師だった。

以前その占い師さんが言っていた。「野本三吉さんは前世高僧だった。健一さんは門前の小僧だったがが教えを伝え聴く前に、高僧が亡くなられたので今この世で再会して伝えてくれます」

また法主さんの雑誌記事の写真をお見せすると「地方にはまだこのようなスメラミコトがおられるんですね。素晴らしい方です。本物です」と。しかし、僕は占いはどうも好きになれず彼との関係に一定の距離を置くようになっていた。今年の夏、その義父も94歳でコロナで亡くなった。

秋に墓参りし遺品の日記や写真を確認させてもらううちに、占い師さんもそして亡き母も佐渡ヶ島に、そして大倭の皆さんに会いたいと思っている気がした。母も占い師さんも亡くなった人たちはみな僕の中に入って来たんだなあと思った。

文化行事の直前に、鎌倉常楽寺生まれの長男から電話が。学生時代の友人たちと先日佐渡ヶ島に行ってきた、「父さんも佐渡に行くんだね」と。

茅ヶ崎育ちの末っ子の長女は鎌倉に実家のある人と今春結婚し、彼の仕事の関係で奈良市大安寺町に嫁いだ。

何がどう動いているのか動かされているのか僕にはわからない。ともあれ僕は門前の小僧。目に見えない人たちと一緒に自分の人生を歩いて行く。

❀ 使命を自覚された月日

群馬県 内田誓子

20年近く経ち参加する文化行事の旅行。再びお会いした懐かしい顔ぶれに、移り行く時を思う。ジェットfoilで片道約1時間の船旅は、かつて小船のみで命懸けの渡航をした昔人を偲ばせる。身延山、鎌倉を経て佐渡での日蓮聖人に関心があった私にとって、初の訪問となった。

10月30日、佐渡に配流された鎌倉時代の順徳上皇、日蓮聖人に所縁の場所を訪ねた。この日は春を彷彿とさせる暖かさに包まれる中で、順徳上皇が眠る真野御陵を参詣した。

承久の乱後21年間、都への帰還を願いながら46歳で崩御されたという上皇であったが、御陵は穏やかで落ち着いた気配が感じられた。杉本さんから「穏やかな気持ちでおられる」と聞いて、一層安堵の気持ちになる。時を経て、桃華園の故平田弘之さんへ魂が繋がれたことに、温かい気が宿ったような印象を受ける。

佐渡への流罪は日蓮聖人にとって、鎌倉・龍ノ口の法難の結果、最終措置としてのさらなる法難であった。現在の季節ならば12月初旬の荒れた海を渡り、厳しい寒さの中で、食糧の保証はなく、当時は念仏信仰者の割合が多数を占めた事情から、命や生活の保証もない極限の環境を50歳の聖人は体験された。塚原の根本寺、一谷の妙照寺でどことなく感じた厳しき、寂寥感はい過ぎではないように思える。

恐らく通常の人であれば、忍耐が及ばない程の境遇に日蓮聖人は直面された。死と隣り合わせの過酷な状況から、法難に遭遇する本質的な由縁を悟られた。

それは改めて使命を自覚された月日であったこと

とを、佐渡の地を訪れてより明瞭に知り得たように思う。2年半の歳月は深い覚醒に繋がり、「開目抄』『観心本尊抄』『始頭大曼荼羅』へと結実した。逆境の中でも毅然とした日蓮聖人の心は常に「法華経を色読する行者として、一天四海回帰妙法を軸として常寂光土建設に生きる意義をかけた」と法主さんは言われている。

日本を正道に導く為に全生涯を費やされたその強靱なお心の中に、親の愛情と同じ慈愛を感じる時、感謝の思いで胸が一杯になる。鎌倉時代当時、末法の世の中に正道の支柱を建てられた日蓮聖人の功績は、礎となり、次代への継承を生み出す為の土壌や種子となった。

その上に法主さんの存在があったことを思わずにはいられない。そこに、切ることの出来ない深い繋がりを覚える。また、花から実がなるように、日蓮聖人から法主さんの誕生へと使命は繋がりが、底辺深くに人知れず流れていた日本古来の「神ながら」の大法が法主さんによって現界に示された。こうした自然の計らいの神秘さには感嘆の思いしかない。

そして、自然環境の問題を始め現在地球上で起きている諸現象を考えれば、人間としての「神ながら」に回歸する道筋が、目に見えなくとも定められているように思えるのである。

今回の旅で、順徳上皇から平田さんへ、また法主さんの足跡を辿ることで、日蓮聖人から法主さんへ魂の繋がりに触れたことを、感慨深く思っている。

最後に、桃華園での団欒は話を聞くこと、話すこと両面で、心の洗濯が出来たこと、皆さんに感謝。そして、華麗なマジックを披露して頂き、心底楽しい一夜を過ごせたこと、且田さんに感謝です。またのご披露を期待しています。

あじさい日誌

11月13日 祝会。久しぶりに大倭会前会長の川端一弘さんが参加されました。

11月15日 大倭神宮月次祭。

11月20日 午前9時から奥津斎庭の金剛大龍王さんの寢床と言われる神籬の周りに新藁を敷く神事が行われました。

11月23日 大倭大本宮月次祭。

この日の法話は昭和41年11月23日月次祭の、『おおやまと』令和2年11月号に「神ながらの秘法―いつの間にか自然に―」として掲載分でした。

12月3日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会の役員会。

夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では

12月4日 午後2時から、ほんの少し清めの雨を頂いた後の大倭神宮において(平和記念の)金鶏祭が行われました。

11月28日 奈良県社会福祉大会において知事表彰1名、会長表彰7名。出席は見合わせ賞状などを頂きに行きました。

交流の家で午後、NPO法人むすびの家の定例委員会。

(菅原園) 11月23日 プロシエクターで「神在月のことも」を上映。

12月6日 大倭神宮月次祭。5年ぶりという埼玉県越生町の菅井勇紀・斉藤麻希さんが参拝。菅井さん創作の楽器「ゆう琴」の各地での演奏旅行の途次。教務本庁で浅井克明・岸田・杉本さんと歓談したり、交流の家に一泊してミニコンサートも。高橋良美さんが料理担当。

11月13日 家族交流会代替企画で写真撮影とメッセージ作成。(須加宮寮)

11月7日 (特養 対面式面会を再開して、連日好評です。)

11月10日 (特養) コロナワクチン接種(オミクロン対応)。

11月10日 (特養) コロナワクチン接種(オミクロン対応)。

新年のご挨拶を申し上げます

我々の体を見て、一つの口から米も野菜も魚も水も、あらゆるものを食べるのであるが、それが血となり肉となり骨となって摂取され、残物は糞便となつて放出されている。この事実を観ても、清濁併呑しても直き正しき心さえあれば、自然は、神は、これを適当にさばかれるものである。ここに初めてあらゆるものを抱擁し、人々に好き嫌いなく平等に接することができる。この神の心を中心ならず平等に救済の手を差し伸ばすことができるのである。この神の心を十分味わうべきである。(昭和二十四年三月三日) 野草社『やわらぎの黙示』81頁より

大倭七十九年 元旦

宗 教 大 倭 教 教 長 矢 追 家 麻 呂
法 人 紫 陽 花 邑 邑 人 一 同

11月28日(デイ) サンタとクリスマスツリーの置物作り。

(茂毛路園)

11月17日 感染予防に努めつつ、合同防災避難訓練実施。

(八重垣園)

12月1日 創立27周年記念でお祝いの料理でした。

大倭会通信

▼3年ぶりに佐渡への文化行事を実施することができました。今号にて参加者の方々が感想を書いて下さっていますが、大倭会の行事にふさわしい顕幽の世界を実感できる充実した旅行になったと思います。去る11月23日月次祭の後に開かれた幹事会においても、参加した幹事さんたちからは旅の余韻をたつぷりと語ってくれていました。

その幹事会では、日聖祭や帰幽祭の準備について大倭会が協力する事項についての確認や、来年度の文化講演会の予定などについて話し合いました。過去の文化行事の記録冊子がようやく完成し、会員の皆様にはお配りします。会員外でもご要望の方は遠慮なく声をおかけ下さい。(岸田)

▼岸田哲様・溝口富士男様 「秋の旅行」では大倭お世話になりました。遠出はもう無理とあきらめていたのですが、福田きよさんが声をかけてくれ、思い切つて参加させて頂いたのでした。晴天にも恵まれ夢のような三日間でした。皆様方に色んな形で助けて頂き感謝で一杯です。大阪市 山本美恵子

あんない

*年始祭(大倭神宮) 1月1日(祝) 午後2時から大倭神宮にて。

密集・密接を避けるためご配慮・ご協力のほど、どうぞよろしくお願ひ致します。

*月次祭(大倭神宮) 1月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大とんど 1月8日(日) 午前9時30分より大本宮西の斎庭にて。注連縄や門松等を火にあげる神事です。当日の天候により日時を変更する場合があります。

針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*大倭会主催祝会 1月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮) 1月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮) 1月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▲佐渡旅行の熱量で、何と12頁でお届けします。(春)